

児童の読書活動とその役割に関する一考察

平井尊士
設樂馨

一、はじめに

読書は、「子ども」の成長にとって欠かせない大切な営みであり、『言葉の力』を育てる上でも大きな支えになっている。また、子どもたちの読書習慣を確立させることは、学力を保障する上でも大切な役割を果たしていると考えられる」と言われて久しい。こうした読書の必要性や読書習慣定着の努力が重要であることは、数々の地方自治体（教育委員会）や実践研究者が中心となつて実態調査や実践報告を行っていることから明らかである。筆者らも、本学司書課程において履修学生がいかに子ども読書活動の必要性を受けとめ、児童サービス（司書が取り組む子どもに対する読書活動支援）へ反映できるかを把握するため、学生の幼少期の読書について調査した。結果の一部は「幼少期の読書とその効果―1990年代生まれの女子大学生の場合―」（『武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）第六十号』）に掲載した通りであるが、この調査は主に日本語日本文学科所属で司書課程履修の学生を被調査者としている。結果的に、日本語日本文学科所属学生に限定した調査を分析した。しかし、本学司書課程は全学科に対して開講されており、他学科の傾向についても調査し、分析する必要性が残されている。

そこで本稿は、被調査者として他学科の学生を含めた調査を実施し、その結果を前回調査と対照してみる。結果を踏まえ、読書活動の役割について、学力との関連を考察する。また、子どもの読書活動の推進に関する法律が提示する「読書活動」は、

「子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力をも身につけていく上で欠くことのできないもの」と述べている。この点にも着目し、調査結果が示す子ども読書活動の実態を鑑み、読書活動にどのような役割が求められるのか、考察を深めたい。

二・ 調査方法と前回調査の結果

二〇一一年度から二〇一三年度までの三年にわたり、各年度の司書課程科目を履修した学生のうち、筆者が担当する授業を履修した計二一三名に、記述による調査を行った。被調査者の内訳は、二〇一一年度が図書館司書課程科目「児童サービス論」履修の四九名、二〇一二年度が図書館司書課程科目「図書館概論」履修の七八名、二〇一三年度が同「図書館概論」履修の八六名で、二〇一一年度および二〇一二年度は日本語日本文学の学生対象に開講された科目であった。二〇一三年度は日本語日本文学科以外の学生対象（計九学科および短期大学部生、短期大学部は日本語文化学科を含む）に開講された科目である。

結果は、被調査者の所属学科による違いを検証する目的に基づき、被調査者が日本語日本文学科所属である前稿「幼少期の読書とその効果―1990年代生まれの女子大学生の場合―」で提示した二〇一一年度と二〇一二年度の結果を一括して、前回調査として提示する。二〇一三年度調査は、被調査者が九学科全体のものであり、二〇一三年度調査として提示する。（なお、二〇一三年度調査には、短期大学部日本語日本文化学科一二名を含む。）

調査内容は、自分自身の読書経験を振り返るものである。具体的な質問文は左記の質問項目に示す。

質問項目

- (一) あなた自身、絵本あるいは本を意識するようになったのは、何歳ぐらいで、どういった理由からか。

(二) あなた自身、図書館あるいは図書室を意識するようになったのは、何歳ぐらいで、どういった理由からか。

(三) 学校に通うようになってから、読書(活動)が教科学習に役立つとすれば、どういった科目で、どういった理由からか。

質問項目(一)は、図書に接して読書に親しむようになった時期を尋ねた。読書活動は、字を読めなくても、挿絵や読み聞かせの音声によって楽しむことが可能である。前回調査でも、自ら読むというより、読み聞かせによって図書に親しむようになったという回答が多く見られた(回答の内訳は、次章で二〇一三年度調査と対照するなかで提示する)。

次に質問項目(二)は、司書課程科目のなかで調査を実施した経緯があり、被調査者が司書としてその職能を果たすことになる図書館について、いつから意識するようになったのかを尋ねたものである。前回調査の結果より、質問項目(一)図書に親しむようになった時期と(二)図書館を意識するようになった時期は、年齢に開きがあることを確認している。図書に親しむようになったからといって、施設を意識的に利用するとは限らない。前回調査では、学校生活によって学習を機に、あるいは集団生活のなかで流行や交友がきっかけとなって図書館を利用するようになるということがあった。年齢が上がってからの回答では、思春期を経て独りになれる環境を求めて図書館を意識するようになったという回答もある。図書館は、資料を集積し、学習を支援する場であるが、情報活用だけでなく、精神的発達も大きく作用して図書館利用が促進されることを確認した。

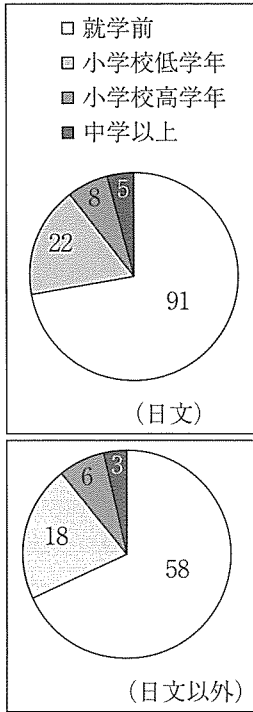
最後に質問項目(三)は、読書活動の役割に関して具体的な意見を得るため、教科学習に役立つかどうかを尋ねた。前回調査の結果は、概ね国語に役立つと考えるものの、自身の経験で言えば社会(歴史)や国語に役立つとする傾向が見られた。自身の経験を記述した回答から、嗜好に合った図書を選択して読書していたら、それと知らずに未習事項の導入を果たしていた、という読書体験が浮かび上がった。このような結果から、被調査者にとって読書活動とは、教科学習の理解促進のため、豊富な語彙を習得するためなど、学習手法の一つと位置づけて何かの目的の手段とするような活動なのではないことがうかがえた。

三. 所属別の対照結果

(1) 本との出会い

質問項目(二)は、絵本や本を意識するようになった年齢と理由を尋ねている。読書活動は、先にも触れたが、識字能力の有無に関わらず挿絵や読み聞かせの音声によって楽しむことが可能である。とはいえ、読み聞かせは保育環境における経済的影響が大きく関わるものである。そして、本学のように私立大学に入学する家庭では、親や幼稚園または保育園の先生と一緒に絵本や本を楽しんだ経験を持つ学生は少なくない。左図上が前回調査(被調査者が日本語日本文学科以外の所属)、下が二〇一三年度調査(被調査者が日本語日本文学科以外の所属)の結果である。

図一 図書を意識するようになった年齢(所属別)



図一において「就学前」とあるのは、具体的な記述回答では「幼稚園のころ」や「小学校に入る前」、「幼いころ」といった

ものである。識字能力を有していない時期に読み聞かせを通じて図書へ親しみ、読書活動へ誘われた経験を持つ学生たちである。

続いて「小学校低学年」としたのは、具体的には「小学一年生のとき」や「8歳くらい」で、「小学校中学年」も含めた。自分一人で文字を読み、読解する能力を得て、個人で読書を楽しんだ経験を持つ学生たちである。

「小学校高学年」は、小学校四年生以上とした。「中学以上」は、中学生または高校生のころ、受験期にさしかかってから積極的な読書活動に取り組んだ学生である。受験勉強のためと思って読む者もいれば、現実逃避のために読書にのめり込んだという者もいた。

「小学校低学年」以降の回答理由では、個人の嗜好に合った特定の物語世界への没入や、たくさん読める楽しさが述べられていた（引用一を参照）。「自分で」読めるということは、介助者の助けを必要としないので、好きなきに好きだけ読める。なかでも、「小学校低学年」という、教育機関で字を学び、先生からは図書室の利用や学級文庫の利用を進められ、朝の読書に取り組んでいたと思しき被調査者らは、「自分で」読めるようになって、読書の楽しみを強く感じたようである（朝の読書とは、授業開始前に毎朝十分、読書する時間を設ける活動で、一九八八年から始まり、平成二五年一月一八日現在の全国の小・中・高で二七、七八七校、総実施率七四パーセントである）。

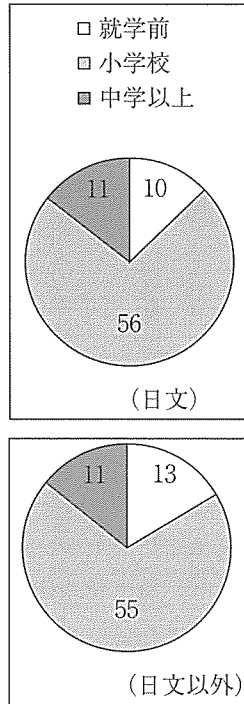
【引用一】私が本を意識し始めた時は小学生のころだと思います。3歳くらいから、絵本はよく読んでいましたが、このころからたくさん本を読むようになりました。理由は学校で色々な素敵な本に出会い、今まで知らなかった世界を知ることが出来たからです。幼いころ読んでいた絵本とはまた違った面白さが小説に描かれていました。（回答者は食生活学科所属。）

全体的には、前回調査も二〇一三年度調査も、就学前という回答が過半数を占める。図一の上下のグラフを見比べると、所属学科の違いはほとんど見られないことが分かる。

(2) 図書館に対する意識

質問項目(二)は、図書館あるいは図書室を意識するようになった年齢と理由を尋ねている。図書館あるいは図書室は、被調査者である図書館司課程科目履修学生が目標としている図書になった場合、その職能を発揮する施設であり、たくさんの図書を提供する施設である。そうは言っても、本との出会いが図書館との出会いになるわけではない。図二に示す通り、本との出会いが集中した就学前という回答は少数派である。被調査者の多くは、小学校入学後に図書館あるいは図書室を意識するようになる。授業の調べ学習で、あるいは、一人で読書する楽しみを知って、たくさん本がある図書館あるいは図書室へ向かうことになる(引用二を参照)。そして、この調査結果についても所属学科の違いは明示されなかった。

図二 図書館あるいは図書室を意識するようになった年齢(所属別)



【引用二】(図書館あるいは図書室を意識するようになったのは) 小学校の中学年から。夏休みの読書感想文のために読む

本や、自由研究の参考にする本を探すようになったから。図書館に行けば、本だけじゃなくDVDを見(ら)れたり、昔読んだ絵本や、マンガや、こういう本もあるんだと(い)う新しい発見もでき、興味がわいたから。(回

答者は心理・社会福祉学科所属、括弧内の語句と脱字の補充は稿者による。

(3) 読書活動の役割

質問項目(三)は、読書活動が教科学習に役立つかどうか、尋ねた。最も明確に指摘のあった教科は国語で、この質問項目においても所属学科の違いは明示されなかった。

前回調査でも二〇一三年度調査でも、教科として国語を挙げているものの、特定の教科に限定することは難しい、強いて言えば漢字・文章読解・語句の理解といった点で国語と言えよう、という主旨の回答が目立つ。そうした回答のなかで、端的に示しているものを一例として引用してみる。

【引用三】 どの科目もテストの問題は日本語の文章で書いてあり、どの科目にも問題自体の理解をしなければ解けないものがあるから、文章の理解力を高めるためには読書の積み重ねが大切だと思う。(回答者は情報メディア学科所属。)

このように国語に限定しない回答が散見されるなか、二〇一三年度調査においては、英米文学など日本語日本文学以外の、被調査者の専攻に即した回答が含まれる。前回調査に見られなかった回答であり、一例として引いておく。

【引用四】 大学に入ってから英米文学に関する映画を見る機会が増えました。なかには歴史や文化に関する知識が必要なものも多いです。たとえば、いきなりアラン・クウォーターメインという人について知っているかと聞かれてもおそらく分からないと思います。そんな時、過去に読んだ海外のSF小説に出てきた知識が役に立つことが多いので、本読んでてよかったです。(回答者は英語文化学科所属。)

引用四は、読書(活動)が後年になって専攻分野の学習・研究に役立つことを示す回答である。同時に、読書していた当時から学習・研究に役立てようと思図したのではなかったことが読み取れる。「過去に読んだ海外のSF小説」が後々役に立つ

たので「本読んでよかった」という感想に至ったのであり、予め歴史や文化に関する知識が必要だから、学習のためだから海外のSF小説を読んでいたのではない。

元来、読書活動は「食事や睡眠のように生存に不可欠な行動ではなく、行うことが望ましいとある社会文化の中で価値づけられ、歴史的に継承されてきている文化的な活動」(秋田、一九九七年)であり、生存にせよ学力にせよどちらにとっても不可欠ではない。こうした認識は、前回調査でも同様に見られた。つまり、読書は、生きていくため、あるいは、ある教科の成績を向上させるためといった、明確な目的があって行うものではない。嗜好に合った図書を選択して読書することは、既に生きることの一部分であり、人生経験の一端である。そうして選択し獲得してゆく人生経験、あるいは、積み上げられた人生経験のうちには、読書を通じて得た知識や感動が役立てられることもある。無意識の選択について述べた回答を見てみる。

【引用五】 私自身、あまり読書を勉強に用いようと思ったことはありません。しかし、いま思い出せるとすれば、漫画で四字熟語を覚えられる本は読んでいましたし、役立ちました。私の母は本屋さんでずっと働いているので、そのような本をたまに買ってきてくれました。いまずぐに思い出せないだけで、もしかしたらそのような本を、勉強しているという意識のないまま読んでいたかもしれません。(回答者は食生活学科所属。)

引用五において、読書活動は教科学習のような学力を意識している、あるいは、学力向上に結びつくものとして想定されているというものはなかった。しかし、「私の母は本屋さんでずっと働いているので、そのような本をたまに買ってきてくれました」という一文からは、図書を出版あるいは販売する業界及び、図書を購入して子に渡す養育者といった、いわば子どもに対しての大人の側からすれば、学力を意識しているのに違いない、という確信的な推量がある。「そのような本」とは、「漫画で四字熟語を覚えられる本」のように、何かを覚えるための本であるし、「本屋さんでずっと働いている」母が選んで買ってくる本だからである。

では、読書活動と学力は実際に関係しているのだろうか。具体的なデータによる根拠として「¹⁵学力調査を活用した専門的な

課題分析に関する調査研究C「読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究」(静岡大学)がある。調査のまとめには、「読書好きであるかどうかが教科の学力の様々な部分と強い関連を示し、その関係の強固さが明らかになった。」とあり、読書好きなき児童生徒ほど教科の学力が高いことが示されている。ただし、「平日の読書時間も教科の学力とは関係しているが、長時間の読書は必ずしも学力の高さには結びつかない。」とあり、考察では「図書館利用頻度についても、同様である。」と言う。読書は、長くやれば良いのではなく、短時間でも好きだという積極性を持って質の高い読書に取り組むことが学力の高さに結びつくのである。

四．まとめ

本稿は、子どもの読書活動の推進という現代的な情勢を受けて、本学司書課程を通じて子どもの読書活動の実態について調査し、その結果から読書活動の役割を考察した。調査は、二〇一一年度から継続しているが、前回調査の被調査者に所属学科の偏りがあったことを踏まえて、過年度調査結果と全学科対象の今回調査結果とを対照した。すると、所属による違いは見出せなかった。

本学学生の傾向は、所属に関わらず、就学前に絵本や本に親しみ、図書館あるいは図書室を意識し始めたのは小学生になつてからで、読書好きの傾向が強い。なお、学力についての調査を参照すると、読書好きは質の高い読書活動を重ねるなかで、学力向上に結びつくことが分かった。学力に関する読書活動の役割を考察してゆくと、量より質であり、自らが選んで読むことの重要性が浮かび上がってきた。読む楽しさを味わい、読書好きになることで、質の高い読書活動が経験できる。すると、学力や将来の生きる力にも役立てられるのである。先に引いた秋田(一九九七年)の読書についての言は、次のように続いている。曰く「学校教育の中で行われるだけでなく、乳幼児から老年までの生涯のあらゆる期間を通じて、家庭で、職場での

日常生活の中で行われている行為であり、さまざまな知識を学ぶ学習の重要な形態の1つである。」と。生涯のあらゆる期間に、日常生活の中で行われ、深く生きることそのものに結びつく読書活動が望まれる。

注

- (1) 西田晋、研究紀要、京都市総合教育センター研究課 (533) (一九九八年 p. 1)
- (2) 司書は、都道府県や市町村の公共図書館等で図書館資料の選択、発注及び受け入れから、分類、目録作成、貸出業務、読書案内などを行う専門的職員で、司書になるための資格は本学で単位を履修することで取得できる。
- (3) 朝の読書、全国都道府県別実施校数一覧および「朝の読書」全国都道府県別実施率 ホームページ http://www1.e-honre.jp/content/k_46-0215.html (二〇一三年一月二十八日閲覧)
- (4) 秋田喜代美、読書の発達過程、風間書房 (一九九七年)
- (5) 静岡大学村山功ほか、平成二二年度 文部科学省委託調査研究学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究C、読書活動と学力・学習状況の関係に関する調査研究 分析報告書第I部 教科の学力に対する1要因の関係 (二〇一一年)

(ひらい・たかし 本学准教授)

(したら・かおる 本学助教)